

の欲求を引き出すような体験教育へと、プログラムの根本を変えていかななくてはならない。演劇は、そのような他者を感じるための、最も優れたシミュレーションになり得るのだ。

(平田オリザ「芸術立国論」(二〇〇一年 集英社))

平田氏は、他者、すなわち未知の世界や異なった世界との窓口を開く「対話」を軸に据え、演劇ワークショップはもとより、自らが表現教育の教材を教科書に書き下ろしたり、実際に教室でモデル授業を行ったりして、その可能性について検討を加えている。身体表現をも交えた表現教育のありようの方向性を打ち出した非常に優れた見識である。

誰しもが演劇に関する知識や実践的な心得を持てるわけではない。しかし、少なくとも、他者の価値観や発想を想像し、それをしっかり認めていく経験を持つ機会をいかに確保するかについて、自覚的になって教育活動にあたることは可能なはずである。学科・教科の教育のみならず、クラスや課外の活動をそういった視点から見直すことが、とりもなおさず表現教育の実践となるように思う。他者との関係性の中から、自己の有りようが明らかとなっていく過程を自覚できるようにすれば、学習者自身が主体的に表現やコミュニケーションに積極的に取り組む意欲を持つことにもつながるだろう。

(5) 課題と展望

以上表現力と表現教育について考察を進めてきたが、最も肝要な点は学習者の発達過程に即して、指導のあり方・手法を考えていくことである。それは文章表現であつても、口頭発表であつても、あるいはコミュニケーションについてもあてはまる。表現教育とは、要は確かな主体を他者や社会との関わりの中で形成していく営みに他ならない。教科教育の観点から、これまでは主として文章記述に関わる教材開発に主眼をおいて取り組んできた。しかし口頭発表やコミュニケーション活動を通じた表現教育においては、従来の枠組みを超え、場合によっては学科教育や他教科との連携を模索したり、課外の活動との組み合わせの中に新たな可能性を模索する必要が生じているようだ。

教材の開発の観点としては、思索や感情の表出に際して、安心感や信頼感のある表現の場を確保しつつ、モチベーションを高める題材を選定すること、また内実に即したフォームを身につけるためのトレーニングを重ねることの重要性については強調してきたとおりである。問題はそのフィードバックにある。添削指導は有効ではあるが、一方ではその回数や分量については自ずと限界がある。また学習者のコミュニケーションに指導者がどういうスタンスで関わるかという点に關しても、検討すべき課題がある。

今述べた課題は評価との関わりもある。正しい文章叙述ができたか否か、問題点に関する理解の程度、口頭発表ならわかりやすさやインパクトなど、優劣をつけたり達成度や伸張の具合を目に見えやすい指標で示したりすることが可能な面もある。また学習者相互の評価によって、評価指標そのものに関する理解を深める方向性もあり得る。一方、独創性や発想そのもの、議論や人間関係の中での深まりのような、実践過程で学習者自身が内面との関わりで深化させる価値の方が、表現教育においてはより重要な側面でもある。優劣や伸張・達成度も学習者の主体性の中に捉え得るものでもある。前項の問題点とあわせて今後の検討課題としたい。

【註記】

1 PISA (Programme for International Student Assessment = OECD による国際的な生徒の学習到達度調査)「Reading Literacy」(読解力と邦訳されている)では、自然・社会的事象に関する批判的分析に基づいて、自己の主張を自由記述・論述することが求められる、日本の生徒の白紙答案の多さが問題になったこともある。

2 管見にふれたものを一、二紹介すると、二〇〇七年五月〜六月にかけて、(財)静岡県舞台芸術センター (Shizuoka Performing Arts Center : SPAC) が主催して、「教育は劇場にあり」と題する社会講座が開催されている。著作などで教育に言及があるものとして、引用の平田オリザ氏の著作、柄本明「絶望の授業」(KTC中央出版、二〇〇三年)など。

* Department of Liberal Arts

(二〇〇七・十二・二十八 受理)

容の方に目がいつてしまい、発表の仕方、事前の準備でのコミュニケーションの取り方に自覚的になる機会が少ないことが挙げられる。「授業」せよという形の課題が一つの工夫点で、例えば指名して質問したり、コーラスリーディングなどをしてしたりするなどの手法について、事前にヒントを与え、発表の際には相互評価シートを用意し、内容だけでなく資料作りや発表の仕方についてもチェックさせてもいる。しかし発表のどのような点が優れていて、またうまくいかなかったのはどのような点なのかをしっかりと振り返る機会を持っていない。発表がゴールになってしまっていて、次へのフィードバックの流れを作れていないのが拙いようである。またグループでの準備段階におけるコミュニケーションのあり方に、どのように指導者が関わることかという点についても明確な方針が立っていない。まだまだ課題が山積しており、こういった形態の学習活動を組み立てるのがいかに困難を伴うか実感している次第である。

事例

小説の会話場面を演劇のセリフのように読み、登場人物の心理について気付いた点を発表する。

こちらは、まだほんの思いつき程度の取り組みであるが、扱いようによってはかなり面白い成果を生むように思われるので紹介する。

素材として用いたのは夏目漱石の「こころ」で主人公「私」が恋愛のライバルKに、恋愛をあきらめるよう追い込む場面である。学習者はそれまでの場面を、通常の発問を組み立てる読解授業によって読んできている。当該の段を通読後、小説の設定に従って比較的身長差のあるペアを選んで、クラスの前でミニスキットを演じてもらう。会話は覚える必要はなく、あくまでテキストを読んで構わないが、一応登場人物になったつもりで、小説の場面に従って若干演技をしてセリフを言うようにという指示をする。セリフを読み終えたあと、追い込まれるKを演じた学習者に、どういう気持ちがあったかを発表してもらう。たまたまこの授業の実践時には「自分のそれまでの人生を否定されたような気分がしました」といった発言がでてきて、それを手がかりに授業をまとめていった。

おそらく小説読解における実践例も多いだろうとは思いますが、表現教育・コミュニケーション教育の観点からも、この事例を捉えることができよう。演劇的には自明のことだが、演じ手は二重に発話表現者となっている。一つには小説の登場人物としてのそれである。例えば相手にどういいう語調で言えば、自分の言いたいことが伝わるか（どう表現すれば伝わるか）という意識である。一方その発話はどう見えるか、自分の発話の仕方が適切であるか否かを、クラスメートの視線をも意識することによって振り返る。これがまさに、客観的な評価を意識に乗せた意思伝達や他者理解の体験的理解である。世阿弥を引くまでもないが、離見の見をいかに日常のコミュニケーション活動の中に意識化していくかに、表現活動のあり方を考える鍵がある。

近年、教育活動としての演劇の可能性についての言及がある。（註2）その一例として平田オリザ氏の著作を引く。

表現とは、単なる技術のことではない。闇雲にスピーチやディベートの練習を繰り返しても、自己表現がうまくなるわけではない。

自己と他者が決定的に異なっている、人は一人ひとり異なる価値観をもち、異なる生活習慣をもち、異なる言葉を話しているということ、痛みを伴う形で記憶している者だけが、本当の表現の領域に踏み込めるのだ。

（中略）

いま、子どもたちは、少子化、核家族化のなかで小さなサークルの中に囲われていつている。偏差値で輪切りにされた等質の子どもたちが学校に集められ、教室でもさらに気のあつた仲間同士でしか話さない。まさに、自分のことしかつてくれる人としか話さない状況が広がっている。

一方で子どもたちは、これからの日本が、国際基準の「説明」を常に求められる厳しい社会に変容していくだろうことを敏感に察知している。温室のような家庭や学校と、社会におけるグローバルスタンダードの競争、この激しい乖離の中では、ある者は戸惑い精神を病むだろう。ある者はその危機を察知して、社会に出ていくこと自体を拒み、引きこもっていくだろう。

この状況を打破していくためには、単なる技術としての表現教育から、表現

などところで、論拠を示し、材料を用意して見解を述べようとしても、専門家が周到に多角的な捉え方を示しているものを前にしては、導入期の初学者からは手も足もでない。もちろん先にも述べたように、素材をうまく生かして課題を構成することは可能ではある。(3)と絡めて、本年度の実践の中で、面白い素材を扱った例があるので紹介しておく。名前の読み方が難しいので、役所で出生届が受理されなかった事件を取り上げて、名付けのあり方について問題を投げかけた投書を選んだものが複数あった。行政としての対応のあり方に焦点を当てたり、名前が人に直ぐに認知されないことの善し悪しを考えたりしたものである。広くは自由や人権、共同体としての社会の変容という問題に深化する入り口にたどり着いた記述例と言え、見べき点でもあり、またそれは添削指導・評価上の留意点でもあろう。

課題

科学技術社会に関わる論文や書物を読み、著作者の考えや問題意識のありかを踏まえて、一二〇〇～二〇〇〇字程度に自分の見解をまとめる。

題材理解のための設問(二〇〇字程度で記述するものを著作の展開に従って教問)を用意し、演習の後解答例で題材の理解度を確認する。しかる後に、各自叙述の材料を収集し、小論文としてまとめる課題である。当初、筆者が表現教育の実践に取り組んだスタートは、この種の課題であった。受験とまではいかないまでも、産業界に携わる学生諸君には、自明に語るべき内容の内面化が起きているという前提であった。自分が専攻する学業にどのような姿勢で関わるのか、またその中で自分の主体的な問題意識がどのへんにあるのかを振り返ってもらい、相当数の課題も作り添削指導行ってきた。しかし、年度に二本程度の指導で、目に見える実践成果を示す学生諸君がいる一方、言葉の意味構成に踏み込んで、思索を組み立てる経験(実感)がないと思われるような文章記述が多いのである。抽象用語のトレーニングからの指導方法の体系化に取り組んだゆえんである。

現在は、この課題を進展させ、グループで一冊の書物を章単位で分担して読み、構成員のディスカッションを経て、グループ単位で書物全体を踏まえたレポートを作成する実践に取り組んでいる。いずれ稿を改めて報告したい。

(四) 口頭発表、コミュニケーション

実社会では、口頭発表やグループ討議が求められる場面も多い。現今にいたってなお、国会答弁でさえ原稿の棒読みだと批判される我が国の口頭表現力は、まさに寒心に堪えないところである。一方近年プレゼンテーションという言葉がはやる。言語による表出以外に、さまざまな機器を駆使して、図表やグラフはもちろん映像や音声などを用いて、聞き手にいかにインパクトを与えるかを競う様相を呈している。企画や意見を採用してもらうために、組織の内外にむかって情報を発信する際のキーワードは「提案」である。弁舌の巧みさ、機器の操り方のみならず、好印象を与え、説得力を増すために、心理学的な研究成果を取り入れた手法が体系化されている。確かに厳しい現実社会に対処していくためにそういう能力が求められることも理解はできるが、そういったテクニクやスキルの教授そのものが、学校教育の目標と合致するとは思われない。

あくまでも自分の考えをTPOに応じて発表すること、また他者との交流を通して、円滑な意思伝達や相互理解につとめることの必要性和意義を、体験的に実感することが先になければならないと考える。近年対人関係をうまく築けず、心を閉ざす青少年のことが話題になる。実際現場の教室にもそういった事案は数多く存在する。また青少年のみならず、職場や社会に適応できずに悩む人々も存在する。文章表現のところでも若干触れたが、表現する場における安心感・信頼の醸成がまずは基本である。従って文章表現の指導以上に、個々の学習者の特徴や状況に配慮した指導が必要になる。カウンセリングに関する知見も有効なケースもあると思われる。

課題

グループ(四人程度)で指定された漢詩について調べ、発表資料を作成して、一〇分程度で授業せよ。

この手のグループ発表は、どの学科・教科でも行われており一応の形は整う。しかし、発表する力を向上させるための効果的な実践になったとは言えない、むしろ失敗例である。反省点を探ると、まず学習者、指導者ともに、どうしても発表の内

構成を組み立てる働きに自覚的になることを促す作用があるのである。ちなみに学生諸君が最も手こずったのが、「フイードバック」という外来語である。

②の例としては、「科学」「技術」「幸福」「使命」「倫理」「環境問題」を用いて200字以内で作文を求めて、①同様添削を施す形が典型である。このように一定の関連の強い用語と字数で縛ると、一種の解答のパターンが成立する。事実学生諸君の解答は一定の形に収斂していく。次第に解答者の個性を出させるためには、もう少し用語数を減らし、扱う題材の自由度を上げればよい。こういったトレーニングを重ねることで、次第に自分の思索をその題材の方向性に沿ってまとめるといふ文章のフォームを学生諸君は獲得していく。

実は文章のフォームというのは、起承転結という形式を付けるのではなく、ある題材の中に内在する起承転結の構造を自ら考える（見抜く、作り出す）ということに他ならない。巷間流布する文章の書き方の指南書に示される、題材の選定や記述のまとめ方を知識として知ることにはそれなりの意義はあるが、自分の思考や思索の対象として選ばれないもの、発想されないものは決して表現として優れた形を取らない。接客の流れの中における客への気配りの表現でない言葉が、敬語の体裁を取っていても空疎な感じを生み出すのも同じことである。それは表現の形態が口頭であったり、身体性と絡むような場合でも同じである。口頭発表に關しての若干の考察は後述するが、ここではもう少し表現のフォームに關わる記述トレーニングについて考察を続けたい。

トレーニング

新聞の読者の投稿を取り上げ、その意見に対する自分の考えを、六〇〇〜八〇〇字程度の文章にまとめよ。

大学受験などの選抜方法に小論文を取り入れているところは多い。批判を浴びた受験競争に対する反省から、知識量や与えられた問題を処理する能力だけではなく、専攻内容に關する興味や知識、さらには適性、主体的な思考力、応用的な問題に關する理解力、対応力などを総合的に評価しようという動きであろう。それに応じて高等学校の教育現場はもとより、受験産業においても多種多様な対応・対策が取ら

れている。受験の場合は、受験に臨む側がその専攻内容に關わることについて、関心興味、一定の知識、問題意識を持つておくことは、建前としては当たり前のことである。従って、受験科目としての小論文では、先に表現のモチベーションのところと触れた、語るべきことの内面化は、合格を手にするためといういささか不純な面は否めないにしろ、それなりに確保されている（必要がある）と言える。

しかし、そういった一種の強制力が働かない状況にあっても、人間を取り巻く自然や社会に關する様々な事柄に關して、主体的に問題意識を持つ姿勢を伸ばし、自らの思索や論考を文章表現として形に導くのが、表現教育としての小論文指導である。その際、本氣に取り組んでみて、自分なりの考え方や感じ方を他人に訴えてみようと思わせる題材をいかに選定するかということが重要になる。その一つの取り組みがトレーニング3である。具体的には、素材の投稿が何を問題にしているのか要約し、自分の見解や記述のための材料を箇条書きに整理する作業を経た上で、若干のスタイルの上での条件指定のもと文章記述に入る形をとった。

取り上げる題材はまさに何であつても構わないのであり、指導者側が例えば時事問題などをとりあげて、随意に指定することももちろん可能である。またその題材として優れた素材をさまざまな情報ソース（活字のみならず数値データやビジュアルな素材にいたるまで）から構成して課題を作成する方法もある。といよりもその方がオーソドックスな指導法であり、さきに触れた受験における小論文指導では、ありとあらゆる分野の、ありとあらゆる形式の課題集のような参考書が用意されている。

新聞の読者の投稿記事を題材として取り上げた理由は、

(1) 学習者が自らの興味関心に應じて、幅広い問題群の中から任意に主体的に題材を選ぶことができる。

(2) 取り上げる問題について意見を述べている者が専門家でない。

(3) 生活環境には身近だが、時事、社会問題として一般性を持つ。

といった点である。(1)に關しては、主体的に語るべきことを内面化することの重要性は繰り返し強調してきたとおりである。一方逆に、あえて興味関心の薄い題材は避けることにもなり、これを補う方向も意識しておく必要がある。(2)が大事

った。自分が実際に働くことを想定しつつ、見学先のシステムや実際に働く人の声について考察しているのである。4年生の後半は、眼前に自らの進路選択を控え、工業高専での学びのまとめを迎えつつある時期である。工場見学はそういう時宜にかなった、表現へのモチベーションとなる体験だったということが出来よう。

従って体験そのものの重みが表現活動に結びついたということになるわけだが、このレポートを課すときに必要なのは、その体験がもたらした思索をいかに形に示すかという部分である。先に学生諸君がそれぞれの個性の中で深化させた工場見学の意義や狙いについては、工場見学を実施するにあたって学科や学級の中で浸透が図られているだろうし、筆者もレポート課題を課す段階（工場見学に出かける前の授業でレポートについての内容について説明）でも一通りは触れている。ただそれを形にする際に、一定のフォームに従うこと、図表や写真を用いて視覚的にも訴えることを条件とした。前者については思索を線状に記述する文章の特質に従って、時系列や内容的な共通点などを整理して書くひな形を示した。後述するように、学生諸君は4年生の前期の後半の授業時に、文章記述に関する一定のトレーニングを経ており、その応用版といった形になったので、非常に取り組みやすかったようだ。また後者に関しては、情報の受け手にインパクトを与え、見やすく分かりやすくする（＝自分の意図が伝わりやすい）ことに留意すべきこととともに、見学先で配布された資料や文献・インターネットによる調査などに基づいた記述について注意すべきことについても強調した。知的財産の尊重の観点から、引用である場合はそれを明示し情報ソースを明確にすることで、自分が表現するものに責任を持つという認識を育てることも表現指導の一環であろう。

(三) フォームとコンテンツ

文章の書き方指南のたぐいには、ブレインストーミングなどの発想法、材料の収集や段落の構成法、文章の記述に関する留意点など、文章のフォームをいかに整えるかについてまとめてあるものが多い。先にも述べたように、それだけ文章表現に関する要請が高いことの表れであろう。また文章に限らず、いわゆる「プレゼンテーション」力の向上と銘打って、題材のまとめ方、資料のとりまとめと提示、話し

方（声の大ききスピード）、顔の表情、果ては服装にいたるまで指導するような、一種のマニユアル講座のようなものもある。学校教育の中では、冒頭述べた多様な学習形態の中で、表現のフォームに関する指導もなされている。

こういった風潮は、形式偏重として批判的に語られることが多いマニユアル敬語を想起させる。敬語の体系が発達してきた背景や、人の社会的立場や関係性の中で生じる配慮と意思やりやいをしろにした、接客のための形式のみを求めた表現であるとの批判であるが、その一方、まずはフォームをしつかり身につけるというプラスの意味があるとの評価もある。敬語を全く使えないよりは、とりあえず使える形を覚えることにも意味を見出す立場であろう。表現における形式と内実の問題はこの関係に似ている。表現すべき内容は、一定の形式を取ることによってはじめて効果的な伝達が可能になるが、形式だけでは意味をなさないということである。根源的には、音声（二次的には表記文字）と意味の結合・対応という言語の機能の本質に関わる問題に関わるのだろう。

トレーニング

① 指定の抽象用語を用いて短文を作成せよ。② 指定の抽象用語を組み合わせて、短い文章を作成せよ。

筆者が担当している4年生の講義（日本文学講読Ⅱ）では、その中の四分の一程度を文章表現（小論文指導）のために割いている。前半段階での導入に上記のようなトレーニングを扱っている。

①は例えば「制御」「循環」などの語を用いて、五〇字程度の文（二文分割可）を書かせ、作成例を示すとともに、赤ペンを入れる添削指導を行うものである。現代社会の問題と関連させることを条件とし、五〇字程度という字数指定がこのトレーニングの眼目で、一定の具体的な場面設定をもとにした記述が必要になる。何をどのように「制御」するのか、そこにはどういう意味があるのか、「循環」するものと言えは何か、どういう状況で用いられる言葉かについて必然的に意識させられることになる。いい足りない表現や「へんな日本語」が続出するので、添削はかなり手間がかかるが、このトレーニングには、言葉が本源的に持つひとまとまりの意味

結びつけた言い方になるが、いわゆる課題作文が、言語表現を阻害する教育活動として働く場合も多々あり得るのである。

一方で自我の確立に従って人間という存在について自覚的になり、自分の個性を示したい欲求、時として傷つきやく繊細な内面を表現したい欲求が湧き上がってくるのもこの年代の特徴でもある。かつては密かにノートに日記や詩を書き綴る営みが一種の通過儀礼のように存在していた。インターネット上に、そしてケータイのサイト上に匿名で表現の場を得られるようになった現代において、サイトの立ち上げやブログが流行するのももちろんこのことと無関係ではない。媒体として、必ずしも言葉ではなく、音楽や身体表現を選ぶケースももちろんあり得る。しかし、情緒や感性を研ぎ澄まし、論理的で内省的な思考を伸張させる思春期にあつては、流され消費されるものでない言語表現活動が重要な位置を占める。

表現する場としての安心感を保ちつつ、自分の内面を外界との関わりから見つめる欲求に即した表現活動として、筆者は低学年の総合国語における詩の授業の中では、以下のような課題を設定して、学習活動のまとめとしている。

課題

各自が愛誦する詩歌を紹介し、どのような内容を歌ったものか、また作者が表現の上でどのような工夫をしているか説明し、自分はどのようところが気に入っているかレポートせよ。

もちろん古典的な詩でもよいし現代詩でもかまわないのだが、詩集や歌集を手に入れている学生諸君がそうそういるはずはない。そこで一計を案じ、ジャンルを問わず音楽に乗せる「歌詞」で差し支えないと言付け加えるのだが、これが実に興味深い結果をもたらしている。もちろん成績上の評価もからめた課題ではあるが、提出率が高い（ほぼ100%）のはもちろん、期日遅れもあまりない。むしろ課題を出すと嬉々として何枚も書き綴って提出してくれる学生が多く、堆いレポート用紙が筆者の机上に積まれる結果となる。「僕のを読んでくれましたか」という声に応えるのもたいへんな事態なのである。内容的には確かに薄弱なものもあるし、言葉ではなく音楽性や流行に引かれて「詩歌」を選ぶ者も多い。しかしながら自分が感じ

たこと、考えたことを表現したいという思いに即した課題として受け止められていくことは確かであろう。

直接に自分の友情観や恋愛観について述べよと言われても、現今の学生諸君（に限ったことではないが）は戸惑うばかりであろう。しかし世の中に広く受け入れられている楽曲に歌われる内容に、自分の経験を重ねながら友情や恋愛のあり方について語るのには抵抗が小さい。友情や恋愛について悩む場面にまさに遭遇し、自分がどう対処すべきか模索しつつある学生諸君にとっては、それは語るべき主題を自分の問題として捉え、かつそれが一般的に敷衍され得るものであることを自覚させることになる。赤裸々に自分自身の体験をさらす必要がないとすれば、むしろ自分の語りたい思いを引き出していると言ってよい。語るべき主題が内面化される契機を与えること、自分の思索や感情を表出するスタンスの確保が表現のモチベーションを高めると言つてよからう。

同様な効果を確認できた実践例を挙げる。

課題

工場見学（4年生）についてレポートせよ。

必ずしも教科教育に関わる内容ではないが、低学年時に学級担任をしたクラス（2007年度4年環境材料工学科）の工場見学に同道する機会を得たので、事後の振り返りの指導をさせていただいた。掲げた課題例は簡略に示したが、実際にはいくつかの条件を付してあり、形として整った文章を書くこと、引用や資料の扱いについて若干の説明を施した上で実践したものである。

工場・施設を見る視点において、先に述べた語るべき主題の内面化の重要性が、この課題においても見られた。もちろん学科における見学先の選定がよかつたからなのだが、学生諸君が、工場見学を自らの問題意識を掘り起こす体験とする意味づけが、このレポートを書くことを通して出来たようである。具体的には、専門学科の講義内容に沿って実際に生産活動が行われているさまを目の当たりにする臨場感を述べた諸君が多かつた。学校での学びと実際の生産現場とのつながりを実感できたということであろう。また、職場としての工場という観点で感想を述べた例も多か

表現教育のあり方をめぐって

高熊 哲 也*

(一) 表現力養成の要請

日本では、その風土的特徴から、自己の明確な意志を主張しないことが一種の美德として扱われ、あうんの呼吸の中で意思伝達が円滑に進むことが尊ばれるような傾向が伝統的にある。そしてその傾向に対しては、戦後の社会教育環境の変化に応じて、一貫して反省的批判が繰り返されてきた。政治・経済の国際化が進む中、日本の経済産業力や国際政治における地位が向上し、学術・企業活動・NPO、さらには草の根の国際交流活動が盛んになるに従って、国民諸階層に必然的に「表現力」が要請されている。

表現力の不足感は、外国語習得においてはオラルコミュニケーション力の育成の重視といった形で指導の力点の置き方に変化をもたらし、一方では意見表明のためのリテラシーという能力のカテゴリーを形成した。(註1)そして、その向上のための方策を講じることが重要視されてきている。従来学習指導要領の中で国語科の学習の柱とされてきた「読み書く力」や「聞き話す力」に、対人コミュニケーションのあり方、独創的でユニークな発想ができること、その素養として自然や社会を見る目の涵養といった要素を盛り込む形で、さまざまな教育活動形態が試行錯誤されている。近年見直す動きが広がっているが、いわゆるゆとり教育との関連で、中学校に「総合学習」の時間が導入されたり、ディベートが学習活動の中に取り入れられたり、NIE教育の必要性が説かれたりするが、それぞれ異なった社会・歴史的要請から取り組まれてきているこれらの動きは、今述べた表現力の不足感と相まって展開されていると言つてよからう。

高専の教育改善の中でもコミュニケーションスキルのアップという形で、近年その要請が高まりを見せている。日本工学教育協会では、口頭発表や討議、記述力の向上に資するべく「コミュニケーションスキルの指導法」というワークショップを開催しており、今年で8回目を数える。また国語教育関連では、二〇〇二年〜二〇〇三年の国立高等専門学校協会教育方法改善共同プロジェクトとして「高専におけ

る国語コミュニケーションスキル教育の評価と改善」というテーマで取り組みがなされた。また全国の高等専門学校における教育実践が論文集「高専教育」などに報告されている。高専教育においては、技術者育成という教育目標から、取り組んだテーマや内容を適切にわかりやすく伝えること、チームを組んだときに意思疎通をスムーズに図り協力態勢を築くこと、などが重視されるが、それも学校・社会教育全体の中の要請の流れの中に位置づけられるものである。

本稿では筆者の授業実践における取り組みを材料に、表現力とは何か、また表現力を養成するための手法に関して考察してみたい。

(二) 表現のモチベーション

表現の一形態として「作文」が挙げられるが、日本の学校教育における作文教育は、戦前からの生活綴り方運動の伝統が深く影響している。一口に綴り方運動と言っても、幅広い考え方があり、対立矛盾も含みながら運動が展開され、その運動史をたどることは容易でない。ここでは、家庭や学校の生活の中に題材を求め、日常生活の中の発見や気づきから、自省的意識を涵養し、自己を取り巻く社会への視点を獲得していく過程に、教育的意義が認められてきた点を押さえておけばよい。文章を書くという営みは、とりもなおさず自己の思考内容の対象化、または書き手という主体の獲得である。その機能を学習者の発達過程と絡ませる場合、いわゆる「作文」を介した教育が、学習者の内面への干渉といった危険も孕みながら、一定の有効性を発揮することは確かである。

しかし現代は、家庭や学校のできごとを語ることを通して、自分なりの感じ方や捉え方を自覚するあり方が、必ずしも自分で快く認められるような状況にはない。戦後、自由と個性の尊重という理念は受け入れられていったが、社会としても個人としても、価値観の多様化は自分がいかに生きるかに途惑いをもたらしている状況にある。例えば家族について書きなさいという題材は、小学校の中学年程度なら家族の紹介や家族の構成員への思いを抵抗なく自然に語るかも知れない。しかし自立期を迎えた中学生や高校生が、自分の家族についてむしろ語りたくない心情を抱くようなケースはいくらでも考えつく。時代状況の問題と青年期心理の問題を乱暴に